

特106

322

りきまか

ちきたうどか



特



始





加藤 太喜治 作

か
ま
き
り

静
處
書
屋
藏
版

大正
4. 11. 11
内交

奉 祝 御 大 典

加 藤 太 喜 治

ちよろづの

ことばつづるもをろかなり

きみがよはひは

ちよにやちよに

吾輩尊崇する世界的偉人而して早稻田學園に
多少の縁由あるを以て 内閣總理大臣伯爵
大隈重信殿にこの冊子を捧ぐ。

この歌集を發刊するに就きて多少の緣由と多大の崇拜を所有して居る文部大臣高田早苗氏に題字を御手數を出來得るだけ少くして懇願數四、文部大臣よりは文相就任の御手紙が參つた。私はそれを序文のつもりにて茲に其の手紙の文を掲載いたします。

拜啓炎暑如燒候益々御清穆勝奉賀候
陳者小生今回の任に就き御懇篤なる
御祝詞を賜はり候段御厚情深謝仕候
先者右御挨拶申上度如斯御座候敬具

大正四年八月卅一日 高田早苗

加藤太喜治殿

かまきり

加藤太喜治作

かまきりの如くにわれを思ひけり
なにかこの世に
雄々しくなさんと、

西京のおくつきにわれ

勤王家

安東鐵馬その人を思ふ

2

萬卷の書と多くの學資金

其かひなくて

老しわれかな

椿年の鯉の画幅を

ながめつつ

五月雨をきく静なる窓

3

天下國家たづきのしろを忘れつつ

語りし人を

われ慕ふなり

『茶を作る家』の芝居を

見し春の

大坂の事など思ひ出でつつ

或時は田舎新聞に投書して
文士氣取りの
昔なつかし

政治家も藝術の人もよひごれも
くだらぬと、
思ふわれくだらなき

こんな歌よみてみたれど
道ばたの小石と同じ
見る人なけん。

百足をば

火箸にはさみ屋根に捨つ

田舎料理屋の初夏の夜

蝦雑魚を賣りゆく女魚賣の
賣聲ききぬ。

午后三時頃

三疊の二階を三人
借りて住む
書生時代の面白きかな。

芋を食べながら道行く田舎娘
罪なき姿
繪にかかまほし

天子様の御やしきをば
をがみける、
愛兒哲彌の七歳の春

楠公の銅像をながめ兒にむかひ、
南朝を説く
春の一日

新聞に和氣清磨の宮作る、
藤野の村の
記事をば讀みぬ。

日毎々々シンガミシンの
縫ふ音と
銀細工する音にあきけり。

南京の古渡り茶器に茶を入れて、
政治など語る
五月雨の晝

政治家のポンチ繪を見て
思ふかな
自由平等の時にあへるを

自動車の人、宰相と、兒にむかひ
大江戸ならば
將軍様よ、

傳奇的の平賀元義を
忍びつつ
その歌をよむ春の夜半かな

三角の馬場辰猪の墓に詣で
シガーを香華に
ありしむかしよ

父に別れ母に別れて
六人の
兄弟姉妹他人のごとし。

手術せし肉のあとに手をふれて、
くすしのわざに
渴仰なしぬ。

肺を病みみまかりし友ありし世に
巡查つとめし
話忍びぬ。

伊里村の正宗白鳥が
日本の文士となりぬ。
人の世の春

大坂の北の新地をゆくわれを、
藝者のみしは
何事かある。

桃太郎と云ふ藝者あり、
春のよのうたげに
白き美し顔見る

富田屋の八千代の顔のしわを見て
タイムのちから
をそろしきかな。

松奴の薄茶手前もながき年
田舎に住みし
われにうつくし

大坂の心齋橋の扇子屋に
一圓五十錢の
扇子を買ひぬ。

淺草の餘興俱樂部に
親兒三人、辨當を食ふ
晩春の午后

病院にありし時をば思ひいでて
こうこ茶づけも
われにはうれし

中國の方言をきいて
東京の田舎者等が
江戸ッ兒ぶるなり。

名月や江戸の奴等が
なに知つて
一茶の氣骨したはしきかな。

漫然と歌よむ人を嘲りし
啄木の歌集
よみて日くらす

松の樹の葉のさきに小さく
水晶の
如くに見ゆる五月雨晴の朝

活動の辯士となりし
わが友の
才子なりしを、美男なりしを、

村人が神馬を逐ふて祭典の
夜のふけゆくを
知らず顔なり。

薪割る斧、人に貸せし
一月を
忘却なせしに六月となる

ひげ剃りて
わが白き顔をみし刹那
俳優とならざりしを悔いぬ。

ゴム草履いと心地よく
おもむろに
来たれば入江紺青にして

赤き色の馬車は和氣行、
黄は岡山と、
稚兒等のさわぐ片上の町

二合入の櫻正宗を京を出でて
ちびちび飲めば
東京に着く。

日光を
結構と人云へどわれはさままでに
思はざりけり。

啄木は金側時計をほしと云へど、
われは賣らんと
思ふこのごろ。

わが賣りし
山の本立に濃き夏の
茂るを見ればいとどこひしき。

石膏のはだかの女像
人のみて、
へんちきと云へばこはし捨てにき。

心中のどん底に人知れずして、
秘めし戀路の
昔をかしき

接吻も戀愛も知らず、
馬鹿のをんな
食ふことにのみ心うばはる

西京は

一 建立のもみぢ屋の
勅使が門に春の雨ふる。

南洋と云ふ人がせし奇術見て
學問などは
馬鹿らしきかな

東京は横に雨ふると叔父は云ふ、
花のちりゆく
四月中旬、

現代の金持がする、
別荘も、
宮島を見ては顔色なけん。

パノラマの繪の如く見ゆ。
五劍山、犬島、屋島
山莊にありて

(見嶋郡宇野佐藤別荘にて)

金箔の吸物なども春のよの
うたげに
いそご感興ありき。

敷知れぬ
多くの佛をつくづくと見れば
をかしき初春の一日

(西京三十三間堂にて)

見せばやな
とつくにの人にわが國の
さくらの花に神功皇后。

三韓を征伐なかに
日本語を
つかへと云ひし大闇たふとし。

新太郎少將のかけ軸を
ちつとながめて、
陽明を思ふ

銅印の
水と云ふ字の隸書見れば
あだかも水のごどくありける。

西京は万亭のマダム老ひぬらん。
そのころ二十四の
われも老ひたり。

輪線香のごとく曲線の
美はなくてつひに消ゆべき
わがいのちかな。

わが姉の良人今年
貴族院
議員たらんとす金は持ちたき。

夏が来た
夏が来た
夏が来た
緑色のわが庭園の木々のしげりに、

みめよきも

被布の上とは知りつゝも

みめよきにまよふ戀のをかしき。

キリストのハリツケの繪を

ながむれば

ハリツケさのみこはくもあらし。

小さき籠

入れし螢のどこ闇の

庭にひかるをくすく思ひぬ。

白熱と云ふ歌集出にけり、

ちかきころ

田舎若者、歌に興味持つ

金側の時計を賣りて
買ふ人の
なきわが著書をつくりて見たき。

衆議院の
彌次がなすてふ
演説の脱線に似たるわが頭腦かな。

天井の龍が鳴くてふ
東照宮
くだらぬ事を云ひしものかな。

病院にありし日はたゞ
いたづきの
癒ゆることのみ吾はねがひき。

甘き酒に酔ひし其日の
わがこころ
ローマンスのごと趣味多かりき。

夕ぐれに
片上灘を見渡せば
そぶろにこひし少年のとき。

のどもとをすぐれば暑さ
わするてふ
健康の時は愚痴おほくなる。

白銀のごと雨ふる日
庭園のさつき花さく
いとも美し。

朝顔の

少さき新芽を鉢に植え机上に置きて、
ひとりたのしむ

40

こぞの夏はたるがりせし

その友は

ことしはあらず、とはにかへらず。

蚊は死しぬ

かとり線香は人の世の

つよき者かつヒントのごとし。

41

たんぼぼの

ちりし日思ひぬ。われ人の

やがて来らん、死のかなしみ

酒の池肉の林も
なにかあらん
平和なければ野獸のごとし。

いにしむかし
樹下石上にのりをともし
高僧のこころいともたふとし。

源の九郎判官が
みちのくに
落ちゆくころかなしからずや。

玉のうてな九尺二間の
うらながや
ともに浮世はさびしきものを。

爛熳の花冷朧の

月ともに

むかしながらに變らぬものを。

愚鈍なる

人の如くに思はれし

みにくき男博士となりぬ。

ある時はこひせし女

おもひいで

むかしこひしき甘き思ひ出。

逢へはいま

たがひに戀はなからまし

こひせし時のむかしこひしき

少年の時
弟のごとく思ひしに
男爵となりしその友こひし。

まぼろしにうつゝに思ふ
わが母の
世にありし日もななとせのむかし。

網之濱の癡寺に友とまごゐして、
かたりし時の
君みまかりぬ。

(岡山故杉山龜五郎氏をいたみて)

理想など説きてよがりし
そのころの
中學時代は樂園のごと、

人の云ふことごとごとく
意義のなき
寝言のごとくこの日ごろ思ふ。

豪溪の寺の椽先きに
秋の夜を
虫とあかせしわれわかかりき。

まづしかり父と母とに
いけにへの
君物くるひせし人の友あはれ。

いと高く
ビュービューと飛行船
空行くを見ぬ春の朝かな。

飛行機の墮落なして
死せし人の
時計など見る博物館に

空論は花のごとくに
實行は果實のごとく
思ひけるかな。

浅草の金龍館の
春の日にあらず駒子は、
見るよしもがな。

淪落のをみなど人は
さげしめど
彼も人の子、浅草の裏。

巷にてゆでたまご買ひ
食ひながら
北廓にいそぐ春の宵かな

隅田川ちかくたそがれを
あはれなる
老人しやべりてなにか物賣る。

神主の白き衣が
夏木立
しげれる中にきざはしを縫ふ。

ポーブラの茶の煮ゆ音の涼しかり
古錢を友と
見る夏の朝。

なにとなく不平の多き
われなるを
死して後には安らかならめ。

菓子器をば
怒りて庭の石の上に
こはせし後のわれをかしけれ。

風變り
せし人と云ひ或人は
罵倒家などとわれおもしろき。

うらなひのさんぎを染めし
茶器なども
只わけもなくわれに興あり。

ちあんつぎの茶碗をもちて
新茶をば
すする夕の窓いと涼し。

某の書籍をひとりひもとけば
世界の平和
うなづかれぬる。

われ死する
その時のわがこころをば
ひとりおもへばかなしくもある。

人の死が魚うる器、その中の
死せし魚みる
こちちするなり。

さすらひの妻なく子なく
漢詩を
うりてたづきの君あはれかも。

天照らす伊勢の神宮
をろがみて
天照る國のわれうれしかも。

油屋のおこんが家も
他の國の
人にはうれし女のさちを

(伊勢山田にて)

いたづらの少年が
汽車にふれいききたえしこと
忘れざりけり。

(伊勢参宮道中にて)

選挙の

この一票のきはまるを
思へば悲し、虚偽なる政治。

酒樽の荷車などの

みどりなる

木の下にある町はづれかな。

あやまれる思想に

染みしその人の

ひとやをいでて著述家となる。

歌作るそのつれづれを

庭先きに

兒のたはむれの水鐵砲を見る。

とやかくと歌つくらんと、
思案する
ノートのさきに蠅のまじはる。

蠅を追ひ
蠅はにけ行く、また追ひぬ。
つれくわびぬ、夏のまひるを。

たをやめを串刺にしたる
記事よみて
人の心のふしぎなるかな。

ふとさめて、
蒲團にとまる蚤をとり
わが血を吸ひしかたきをうちぬ。

自轉車の

うしろにバナマ賣り歩く
田舎の町の夏の朝かな。

錢かせと

ことはりしをば人いかり
わがのぞをしめるをそろしき夢

なき父のわすれがたみの
ヲランダの皿など出だし
昔思ほゆ。

慶長の小判なご

いとふるき
ふくろよりいだし友とながめぬ。

人の云ふ戀もさふろふ。
そのかみの身をつくしたる
戀ばかりしき。

火葬場になきわが母の骨ひろふ
忘れがたなき
ななとせのむかし。

かたくなの人のいかりもむかしなり
妻子をもちし
山の寺かな。

つりがねをかけし松の樹
なくなれど
むかしながらのふるさとの山。

薄茶いごひ砂糖もちひし
そのかみの
茶の宗匠の寺の庭かな。

下宿屋に
ひとりありにしそのころは
砂漠をひとりゆくこふちしぬ。

秀才なる
君みまかりぬ、白バラのこご
童貞のうつくしきかな。
(故三井銀行員山本氏をいたみて)

わけもなく腹たつことの多かりき。
かたつむりのこご
そとでせぬわれ。

村醫者へ

あそびに行くもうるさけれ。

人にせじ云はずはなたかきわれ

山の國に生まれし母の海の村へ

とづきて死せし

人のゆくする。

氣くらゐのたかきわれをば、

天狗とか、

云ひし田舎の人のうるさき。

おかめをばおたふくと云ひころげても

鼻をうたぬと、

よきをしへかな。

かつてわれを
ゼニヤスと云ひし村夫子その人こたび
代議士となる。
(鶴浦代議士に呈す)

消息のたえし友思ふ。
真光寺鐘樓にのぼり
かたりし時を、(在朝鮮京城第一銀行中村太郎氏を思ひて)

勤儉にして家を修め
年わか
死せしわが父いとほしきかな。

酒ぐらの屋根の雀を空氣銃
もて、うちしなど
一昨年の冬。

ほしかつを
賣りありきながら時折を
歌をすさびし忠朝あはれ。

(藤原忠朝を思ひて)

歌なくば三谷訪ふ人もなしと、
吉備の歌人
嗚呼忠朝よ。

忠朝の朱の文字入りし歌草紙、
なきわが母を
忍びつるかも

いにしむかし
驛路の馬、とりかへし
家のとびらに幕府おもほゆ。

博文がかきてあたへし掛軸を、
もちし村長
むすこごらなり。

土管つくる事務所の庭に、
うつくしく
サフランの花咲きにけるかも。

陶器作る家にならべし陶器見れば、
さまざま人の
なみ居けるかな。

雨に濡れし石灰船の
海の上に、
焼けゆくままにすてられしかも。

エブロンをかけし田舎のたをやめを、
桃の畠の
家に見しかな。

麥刈りに事多きためこの日ごろ
小學校は、
やすみとなりぬ。

校庭に
麥干せしさむしろを、
夕日のてらす初夏のある日

山の上の桃の畠に、
一日を
拾五錢にて女雇はる。

人買にかざはかされし其の乙女
今年の春に花嫁となる。

ふたさをの長持の中に、
一の字の
草紙にみちし嗚呼登々庵。

宮嶋の停車場ちかく
ガイドなる
乙女の顔に夕日の照らす。

鶯の梅の木にとまる
繪にあらで、
梅に雀の繪のおもしろき。

はげ頭悉皆屋が、
姫路より
來りて四十八錢を拂ふ。

うらばんに
先祖の墓に詣でし日、
山に無名の人の骨見る。

まんまろきテマリのごとき心にて、
その人の世を
をはりたきかな。

物ぐるひせし友ごちの
ちかごろの
たより知りたし夏の夕ぐれ。

なにとなく
しづかに物を思ふ時、
わが世淋しくあはれなるかな。

庭園の木立の葉越にゆくりなく、
三日月の影
ながめけるかな。

鎗の如き光りたるこころもつ
をみなうたてく
思ひけるかな。

カムヒヤ、モンキーなど、
とつづくにの
稚兒遊ぶ動物園の春。

つれづれを
ただ譯もなくえらぶりて
書家と語りし夏の一日。

宅風呂にこころ静に

湯あみして、

歌思ふ時いとこちよき

そのかみのわかきわが戀思ひ出で、
老ひゆくにつれ
馬鹿らしきかな。

垣齋の達磨の繪畫を、
ながめつゝ
洋畫の趣味を日本畫に見る。

行く水に文字かくそれに
似たるかな。人のなすてふ
戀の姿は。

蜀山の阿房宮に似し、神戸なる
二樂山莊
面白きかな。

紀國へ夏の旅をば
物せんと、
友かしまだちしぬ或るあさぼらけ。

東京にさすらひし頃、九つの
下宿屋の娘
人妻となる。

五百戸のわが片上に
美人なく、英雄もなく、
心細きかな。

いにしむかし
はしためあまたありし日の、
すどろにこひし母在りし頃。

宵越の金をつかはぬ
江戸ッ兒の
かたぎにそみしあはれなるわれ。

たらちねの母のこひしき
乙女子が、男こひしく
なりにけるかな。

或時は人に知らぬたのしみの
その日思ひて
うれしかりけり

官報は見るもうるさし、
なさけなし
天下の浪人われ老ひしかな。

世の人は紅燈緑酒の
漢字見て
テキニカルのごと夢な忘れそ。

一升の
榊の隅より酒のみし
その友たよりしるよしもかな。

爛熟の桃をながめて
思ふかな。
われそれに似し時のありける。

忘れじ、あさきちぎりも
神戸なる
その時君が嶋田の鬘を、

とある年
須磨にみめよき女あり、
只なにどなくこひしかりける。

池のごとき
片上灣に富士山の
ごどくに見ゆるとた松の山。

朝鮮の餉賣が賣る賣り聲は。
なんばたべても
齒にひつかんど、

隣なるまろき櫛の木の
をほきなる
木立を月夜にモンスターと見る。

駄作をば
ひとりよがりて歌つくる
窓にうれしき日ぐらしの聲。

亡き母の歌かきし暖簾、
ながめつゝ
をみなにしてはちからある文字。

草ふかき田舎のをみな
あきはてぬ、
新橋の藝妓戀しかりける。

氷をば四五皿くらひ
下痢なせし
須磨に在りけるむかしなつかし。

うつくしき都の女浴衣なる、
姿見まほし
田舎にあれば。

うつし世の
走る屍行く肉の
人のこゝろのをそろしきかな。

おのが身に比較をすれば、
幾倍の
物持ち行きぬ、蟻ちからつよき。

夏の夜は
銀座の町を散歩せし
そのころこひし昨日今日かな。

はし居して夕涼みする夏の夜に
新内をきく
北の町かな。

頭島に行きて思へり、
島にある
小村は別に天地ある哉。

(和歌郡日生町近き一小嶋也)

かねをたたき細工する音、

夏の日の

真晝にきくぞうたてかりける。

西京の三拾三間堂の風の神に、

似し男あり

磯ちかき村。

クレーをば

積む馬車つづき通る日の

いともうるさし夏の午后かな。

顔の色くろき男とをみなあり、
勞働をする

君が住む村。

山寺の茶室にありて
庭見れば
墓の石をば踏石とせり。

行く雲と水平線と
一つなる
かなたは露國と人の云ひける。

氷をば賣り行く
聲のいとうれし
焦熱地獄のとき夏の日。

水樓に天の橋立
ながめつゝ
ビールをのみし昔なつかし。

播州の言葉自慢に話し行く
田舎の町の
料理屋をみな。

離縁せし妻の櫛をば
虫干に
いたして昔を人の思ほゆ。

ある人の都會生活をのろひては、
子孫亡滅と
云ひしをかしさ。

裸なる色黒き男
横に見て
巡査のすぎぬ夏の村かな。

さすらひの未見の人の
おとづれてわらぢ錢乞ふ
夏の一日。

風鈴の軒ふく風に
なる音に
ねむ氣催す夏の晝かな。

生活の断片を歌に
うたひしも
はえなくさちなくわれかなしけれ。

細長き白壁多きわが町を
船より見れば
いどうつくしき。

デリケート其の味に富む
魚多きわが片上は、
いとごうれしき。

萬朝に米子再勤を見ていとご、
をみなかなしく
思ひけるかな。

空海の落款を見て
つくくくと
雅印の美をば思ひけるかな。

富めるありまづしきありて、
はらからの
身の上思ひおもしろきかな。

あほう娘

お民となりし女優なる、
可知喜代子をば悲しく思ふ。

文盲のしれもの富みて
才多き人のまづしき
こと多きかな。

大學の教授をなせし或る人の
物くるひして
片上に死す。

肉体を見て人の身の
いみじきを
造化の神のあるこころしぬ。

あめつちの
そのはじまりとをばりをば、
人の知り得ずふしぎなりけり。

東京の九尺二間にすまひせし
その頃いどぞ
こひしかりける。

シンガーの
一時間の價をば日給と
くらべし君よMと云ふ友。

あめつちが
うごきだしてはたまらぬと、
おのづからなる歌つくりたき。

周防なる岩國の町の
料理屋に
よき酒のみし事おもふかな。

夏の日日は日ねもす山に、はた川に、
わが兒の顔の
色くろくなる。

そのかみは
都にありてあらそひし
その美術家のフランスにあり。

(在佛正宗得三郎氏を)

酒の後誰れ彼れの
けじめなく
わが歌をよむきのふけふかな。

すゝばちの底にも似たる
R町は人のこころも
蛙のごとし。

追憶の甘きを人に語る夜の
軒に涼しき
夏の月影。

しづかなる山の下庵を訪へば
かけひの音の
すすしかりける。

廣重の不二の高根の
繪をながめ
三伏の暑さ忘れけるかな。

光線のつよき夏の日

物みなを

あきらかに祝るここちするなり。

アカ、コゼミ、ダンゴ、あるひは

ゴロフなる

をしの蟬ありわが兒の教ゆ。

よりざりの五厘の中の古備前を、
参千圓に
人の買ひける。

(以下二首名古屋小出某の骨董競賣の記事を讀みて)

壹圓の古き備前の伊部焼が
九千圓とは
おどろかれぬ。

廣重の錦繪あるはHRSなど
今日このごろの
わが書齋かな。

はた／＼とちよんぎーすと
かまきりと
虫をばとりて山より歸る。

磯近き家のわらべの
さそひ来て
海邊にわが兒あそびにゆきぬ。

兒の云ひき、
へぼな大工が指をきると
修身いろはかるたにありと。

うす野呂の田舎の兒等が
夕ぐれを野良聲はなち
かたりゆくなり。

小波の『夏やすみ』てふ書を読みし
少年の夏
なつかしきかな。

清水の音羽の瀧をながむれば
かくても瀧と
音の名高き。

わが耳に百雷の落つ
ことちして
心も澄みぬ裏見の瀧は。

團參の京の町をば列つくり
歩む姿を
われさげしみぬ。

田舎人雑踏の電車に
おくれじと
下駄落し行く花の京かな。

肥前なる伊万里焼賣る
あき人の
陶器あがなふ夏の朝かな。

辨慶の比叡山に
持ち行きし
つり鐘を見る三井の寺かな。

紫の式部源氏をあらはせし
書齋ながめぬ
石山寺に。

縮緬をあきなふ人と語りにし
琵琶湖の上の
春の船かな。

八ッ橋の菓子、祇園團子など
家つとに買ひぬ
京のちまたに。

酌はたば
酒は正宗山は不二
花はさくら木人はサムラヒ。

神田なる五十稻荷の縁日に
そゝろありきし
その頃こひし。

水稻荷ぬけ辨天蛸薬師
いとめづらしき
ほこらなるかな。

清水の観音様にまうづれば
阿古屋景清
その戀こひし。

うつくしき京の藝妓の
あだ姿
見ればわが妻われにみにくし。

しばし間二つの眼とちてあれば
めしひならざる
われいとうれし。

海に投じ嶋に流され末遂に
城山に死す
西郷あはれ。

細き路地風とほりよき
軒下に桶屋のおやち
桶をつくろふ。

チヨン齧の岩倉卿の洋行を
思へば大正の
日本のひらけし。

蟬をどる

いともやすきを猛獣の
獅子檻にありて稚兒の見るあり。

サーベルの音カチ／＼と白き服の
おまはりさんの
夏の村行く。

いと白き

肌のをみな石膏の
女像に似たり湯の宿の朝。

吞舟の魚とるわさはがたきなり
雑魚とるやすきに
人のほりする。

志磨の國

日和山にて海見れば
八十島かけて眼中に在り。

二見浦岩のほとりに石ひろひ
寶のごとく
なす吾れをかし。

壹錢の輪なげをすれば
さちあると
すすむるもをかし二見浦かな。

三石の舟阪峠を吾れ行けば
無錢旅行の
人あまた見る。

易者、ホーカイ屋すべて生活の
敗者のよぎる
片上の町。

静なるMの町をば
自働車のけだたましきひびき
いともうるさき。

軒ちかくとある高き木の幹に
蟬のとまるを
ふとながめける。

遊女屋もあり、旅人の
錢を吸ふ
志麻の國なる鳥羽の町かな。

つぼ焼のさざるをば賣る
掛茶屋のかず多くある
二見浦かな、

わが家のこととなく、はた
かしことなく
壁白くしてあかるくなれり。

關東は
はにふの小屋の家多し
わが中國は瓦屋多し。

難波なる高津の宮の
おばしまに
百方のいらかながめけるかな。

築港の棧橋にむれて魚釣るを
上方ゼイ六と
人の云ひける。

庭ちかく
廣き座敷にひとり居て
別荘にあることちするなり。

朝日さす夕日さす繩
壹盆と
朱甕七瓶ありきと傳ふ。

(備前和氣郡藤野村字藤原谷の、和氣清應公の光瑩に、
古來の傳説を其儘歌に作りぬ。壹盆は二拾尋なりと)

花の枝持ちて通れる女教師の
お辭儀の姿
乙に澄せる。

夏の夕雀のごとく話して
ひるはなまけぬ
とあるをみなの。

いりぼし(干魚)のわらぶと持ちて
バラソルの
料理屋のマダムひなぶりをかし。

木に竹をつぎしが如き世辭云ひて
客もてなしぬ
とある女將が。

涼み臺店さきにいだし
高聲に
えらぶり語る田舎あき人。

閑谷の中學生がえらぶりて
自轉車に乗り
田舎町行く。

夕立の俄にふりて女あまた
軒下に涼む
むかひの家に。

怪を談すわれ怪なりと圓了の
落款を見る
春の夕ぐれ

(地方巡遊の井上圓了博士の書幅を視て)

ひとがらのみめよくかててをこそかに
Rなる町長
町長にをしき。

山陽のさすらひに金なかりし日
かきしいしぶみ
まつる人なき

(某家外婦の墓故郷片上西ノ坂にありけるを)

ボロ纏ひ女すきにて
唐詩にすぐれし君の
そのかみ忍ぶ。

(武元登々庵の親戚某詩人を)

シベリヤを單騎旅行のそのかみを
將軍の顔に
忍びつるかも。

(以下二首福島大將中國巡遊の時)

將軍の
國威世界の五大洲に
満つてふ文字尊かりける。

歌集を發刊する緣由と動機

加藤 太喜治

月並みの事を云ふではないが人生如朝露で、青春の熱度の高いホープもタイムは刻一刻と時計の針の進むに隨伴して冷たい静かな最後の空虚な自分を、永遠に少數な人類に僅に印象を與へる外に。何物もなくなるのである、ヨ子野口の英詩を追懷せしむる事はこのエモーションに對して偶然でない。

此の世界は最後まで私の住所で無い、あゝ日は暗い山上の木の葉の群れに腦まされてその進路を失つた。私の此の世界から飛び出す機會は永久に有るでしょうか

私はまたトラフホルガーの大戦争にナポレオンはチルソンのため一敗地に塗れた時に、

私は私のつとめを成し終つた。

チルソン、將軍は世界人類に永遠に、自己を深刻に、鐵壁に、ほりつけたような事業を成し終つたのである。故に不平はない満足である、多くの懷疑をアラユル自己の人生に破壊して、多くの人は自分と共鳴の老幼男女を問はず陳腐ではあるが、パンのみにて活くるにあらず無論衣食に吸々とするが、それと共に生ひてかひある多少の人の行く旅路に小さい足跡を残したい、否な、多少快かなビジネスを大きく成し能はされは小さくなりとも反響を、人生に與へたいと云ふ思想感情情緒氣分を的確に大小深淺厚狹を論せず、所持者たる事は疑はない。

太閤、ナポレオン、和氣清麿、シーザー、かゝる人を夢みるまでもない英雄的豪快な史的事實にあらずんば、バイロン、業平卿、近代のタゴールかゝる人が人心に與ふサムシングを羨望せず居られない。不平もあり、憧憬もあり、寂寥もあり、不知不知宗教的に近い安心立命を敢て強制的に發起する場合もある。

自己の思想、感情、情緒、氣分を率直に多くの形式に囚はれずに表象する主義を新らしく日本の歌界に提供する努力を以て、日本語の表現能力がどれほどまでに範圍があるか其れは顧みる邊はない、うぬぼれであるが自信力を所持して居る田舎にあれば田舎趣味、過去の青春のさくらの花の咲き亂るるが如き惑溺の濃い色彩に、富みたる時代はそれに適合し

たる色彩を以てわが歌をつくり、旅にあれば旅に、家にあれば家、云ひ換ふれば常住坐臥、道ばたの石ころも、わが歌のモデルである。

眞實に私の歌を愛讀さるる諸君の心の琴線に私のエモーションは共鳴共響するのである。

第三帝國主盟茅原華山氏は出版に就き御厚配を蒙りなほ多くの厚情を第二の歌集出版に就き賜はり茲に謹謝す。

正宗義智氏の配意を最多く謝す。

吉崎一夫氏の注意を並に謝す。

岡山評論編輯主幹山根虎城氏の配意幹施を謝す。

肥後の人大平蘇岳氏の厚意を謝す。



大正四年拾一月五日印刷
大正四年拾一月十日發行

定價五十錢

著者

加藤太喜治

發行印刷人

正宗義智

印刷所

正宗印刷所

發賣所

加藤如水社

岡山縣和氣郡伊里村大字禮濱參千六百六番地

岡山縣和氣郡伊里村大字禮濱參千六百六番地

岡山縣和氣郡片上町千二百參十九番地

終

